

チャイルド・ファンド・ジャパンだより

[スマイルズ] 2010年5月NO.19

SMILES

<http://www.childfund.or.jp>



シリーズ“食べる” 8

ーフィリピンの庶民の味ー

海に囲まれたフィリピン、魚は大切なタンパク源です。
冷蔵輸送手段が限られているため、干し魚に加工されます。
マーケットには、種類も値段も様々な干し魚が並びます。
値札は1kg単位の値段です。(1ペソは約2円)
塩辛い干し魚を油で揚げて、ご飯と一緒に食べます。

写真:センター51(ミンダナオ島ディボログ)

ChildFund
Japan

チャイルド・ファンド・ジャパンは、1975年より、
アジアを中心に貧困の中で暮らす子どもの健やかな成長、
家族と地域の自立を目指した活動をしています。

特集

住民主体の組織作りを推進する

地域の協力で支える子どもと家族



地域の協力で支える子どもと家族

フィリピンで実施されているスポンサーシップ・プログラムは、右の三つの領域の活動から構成されています。SMILES16号では「子どもの成長」、17号では「家族の生活改善」を取り上げましたが、今回は「住民主体の組織作り」についてご紹介します。チャイルド・ファンド・ジャパンが支援する「住民主体の組織作り」は、多くの場合、協同組合作りという形をとります。協同組合作りを通して、社会的に弱い立場に置かれているチャイルドの家庭が、どのようにして自分たちの努力で課題を克服し、生活改善につなげて行くことができるのでしょうか？今号では、センター35における協同組合の成長をご紹介します。



追いやられる人々 | マイナスからのスタート

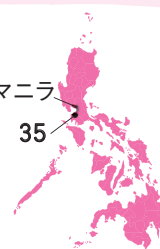
「1992年、マニラのスラムから強制的に移住させられた頃、私たちの生活はマイナスからのスタートでした。水や電気がない上に、働く場所もないため収入がなくなりました。移住後の生活は本当にどん底でした。」現在、組合の理事であり、2004年まで支援をうけたチャイルドの母親でもあるレア・ルビオさんは、ダスマリニャスへ強制移住させられた頃の生活を振り返ってそう語ります。



▲移住の直後は、こんなバラックの家ばかりが立ち並んでいた。
 ▲レア・ルビオさん バグアサ信用貸付組合の理事。創設メンバーの一人。

フィリピン

【センター35】 マニラ
 活動地域のカビテ州ダスマリニャス町は、マニラの南40kmほどに位置しています。1980年代から始まった都市開発優先の政策を推進するため、この町には、首都マニラのスラムから強制退去させられた住民の再定住地が多く作られました。センターは、1996年から、スポンサーの方々の支援を通して、子どもたちの成長、家族と地域の生活改善の活動を実施しています。15年の時を経て、地域の自立に向けた努力が力強く進められています。



スラムに住む多くの人々は「スクワッター」と呼ばれ、仕事を求めて農村からマニラに出てきたものの住む場所がなく、私有地や公共用地を許可なく占拠して生活しています。開発の恩恵を受けるところか、開発計画が実施に移されるとしばしば大きな犠牲を強いられます。ルビオさんも、取り壊しにあった家の資材と共にトラックに積まれ、雑草に覆われた土地が広がっていたこの地に追いやられてきたのです。貧しい人々の抗議の声は聞かれず、生活は守られませんでした。生活の糧を手に入れることすらできない貧しい人々には担保もないため、銀行からお金を借りることもできません。人々は月の利息が20%を超える「ローン・シャーク（ローンのサメ）」とも呼ばれる高利貸しからお金を借りて、借金地獄に苦しめられたのです。

生活改善への歩み | 希望が芽吹いた

センターは、1996年から支援活動を開始しました。教育支援などチャイルド向けの活動に加えて、家族の生活改善のため自助努力グループ作りを始めました。「それは、本当に小さな一歩でした」とセンター長のエドさんははみじみ語ります。チャイルドたちの母親が中心になり、毎日1ペソ＝約2円を積み立てる「ピソピソ貯金」（ピソは1ペソの意）にまず取り組みました。必要➡

▼に依じて蓄えた資金を参加者に貸し出す仕組みを作ったのです。しかし、これでは数百ペソの規模にしかならず、貧困を軽減することには繋がりませんでした。

そこで、センターは借金地獄という状況を打開するため、協同組合を立ち上げることを親たちに提案、協同組合について学ぶ研修会を開催しました。しり込みする親たちと時間をかけて何回も話し合いを重ね、37人のチャイルドの母親たちが参加して、2000年、「パグアサ(希望の意味)信用貸付組合」がその一歩を踏み出しました。

組合が結成されてからも、センターは組合員たちが自分たちで運営を継続していけるように、皆の声に耳を傾けながら活動を導くリーダーを育てる研修、資金の貸付・管理、さらに会計処理の研修など様々な研修を実施しました。さらに、組合の持つ可能性を理解してもらうため、約20km離れたタガイタイ市にある協同組合と交流する機会を持ったのです。この協同組合は、かつてチャイルド・ファンド・ジャパン(当時CCWA)の支援を通して組織化され、自立を果たした組合です。「私たちと同じようなチャイルドのお母さんたちが自信をもってバリバリ仕事をしている姿を見て、『私たちも自分の力で生活を変えていくことができるかもしれない』と、俄然やる気がわいてきました。」と、レピオさんは言います。弱い立場に甘んずるのではなく、自らが直面する問題の解決に努力する、そんな生活改善への希望が生まれたと言います。



↑組合設立の頃からの苦勞を語る、センター長のエドさん

▶組合の会計担当者レミーさん(右)にコンピューターでの会計記録の作り方を指導するセンタースタッフのイザベル(左)さん



◀新規加入者への説明会。組合のメンバーになるためには出資金を負担する。

生活が変わり始めた

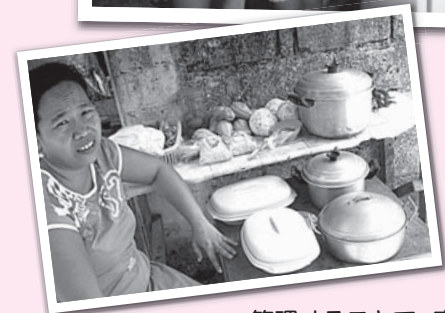
生活を支えるローンの提供



↑広くはないが、家電の揃ったビクトリアさんの家
◀家の前でお鍋を並べてお昼のお惣菜を売るビクトリアさん。

組合の中心となる事業はローンの貸出です。利子は3%(平均6ヶ月程度の融資期間)。商売の元手、入院費用や薬代、家電製品の購入、家の修理など、毎日の生活に必要なお金がローンとして提供されています。担保がなく、銀行からお金を借りられない貧しい家庭には大きな助けです。

チャイルドのジョアン(小学校6年生。写真左の中央)の父親は石工をしていますが仕事が不定期で、収入は不安定です。収入を補うため母親のビクトリアさん(左)は4年前から調理した惣菜、仕入れたソーセージや肉を近所で売り歩く商売を始めました。しかし初めは高利貸からお金を借りていたため「毎日返済に追われた」と言います。組合に参加し、ローンの申請をしたところ、組合の実施する研修に参加するように促されました。研修では、商売で得た収入を仕入れのための



▼お金、生活費、貯蓄の3つに分けて

管理することで、商売を円滑に動かしながら生活の必要も満たす方法を学びました。

組合のローンを借り始めてからは商売も軌道に乗り、冷蔵庫、洗濯機、テレビを買い揃えることができました。冷蔵庫は暑いフィリピンで食品を売る商売には欠かせません。洗濯機のお陰で家事が楽になった分、商売にかかる時間も増えました。「昔は高利貸しから借りなければならぬほどお金に苦勞しました。今、こうやって電化製品を買うことができたのも、組合員になったからです。」と、ビクトリアさんはうれしそうに話してくれました。



↑子育てに忙しい近所のお母さんがお昼を買いに来る。

NEWS!

組合創立から10年を経た今、
「パグアサ信用貸付組合」は
ルビオさんが訪問した
タガイタイ市の協同組合にも
迫る規模になりました!



組合の組織図
(2009年度末現在)

- 組合員数:510名
(チャイルドの家庭136)
- 資本金:600万円
- 総資産額:1000万円
- 純利益:160万円

「パグアサ信用貸付組合」は、毎年3月に総会を開催し、新しい役員を選挙で選びます。今年も200名以上の組合員が集まって1年間の活動実績と会計報告を承認し、次年度の役員を選びました。組合が民主的に運営されるのも、「ひとりはみんなのために、みんなはひとりのために」という協同組合の理念に基づき、自分たちの問題には自分たちで声をあげ、自分たちの責任で行動し解決していくという原則が、組合の成長の中で実践されてきたからです。

さらに、組合は、20名の小学生とハイスクール生に奨学金を提供し、子どもたちの未来を支える事業も始めています。ドロアさん(写真右)は、夫が病弱で働けないため、ドアマットを編んだり、洗濯婦をして家計を支えています。「上の子ども2人は小学校2年までしか学校へやれませんでした、末っ子のメイグレースは奨学金を受けて学校を続けています。この子は学校を終えて欲しいと願っています。」

20年前に、貧困のどん底に落とされ、希望を持ち得なかった人々は、センターの支援とともに発展した組合の活動を通して、自らの力で困難を切り開いていく力をつけることができるようになりました。自分たちの生活の問題を話し合いにより、お互いに助け合う活動を自ら担うまでに成長したのです。チャイルド・ファンド・ジャパンが支援を始めてから15年。ここまで力を蓄えてきた人々が、スポンサーの方々の支援を必要としなくなる日が来るのもそれほど遠くないことでしょう。



↑組合員は、組合運営を担う理事の選挙で、貴重な一票を投じる。



↑総会の司会をする組合職員
(2009年3月の総会)



↑メイグレース(左)が学校に通えることを喜ぶドロアさん(右)



↑組合の奨学金を受け、支援チャイルドたちと同じ小学校で学ぶ4年生のメイグレース(左から2人目)

取材後記

募金グループ 松浦宏二

今回の取材を通して感じたのは、この地域の人々の生活を着実に変えつつある組合の活動は、センター活動が生みだした地域の大きな力であり、支援チャイルドの家族、支援を受けた元のチャイルドたちの努力に支えられたものである、ということです。

スポンサーシップ・プログラムによる支援は、子どもたちやその家族の中に隠されている力を掘り当てる「宝探し」のような事業であると思ふことがあります。今回の取材でも、きらりと光る宝が顔を出し始めていることを実感しながら、ダスマリニヤスの地を後にしました。



松浦宏二(前列左端)
組合理事やセンタースタッフとともに

ネパールからナマステ!

vol.1



実年齢と学年の違い

ナマステ:ネパール語で「こんにちは」

あれ、14歳で4年生? いよいよ始まったネパールでのスポンサーシップ・プログラム。現地からぞくぞくと届く、支援を待つ子どもたちのプロフィールを見てみると、あることに気がつきます。ネパールでは満5歳で小学校1年生に入学できますが、13、14歳で4年生、16歳で6年生、といったように、学年に比べて年齢の高い子どもが多いのです。「勉強が苦手で留年した」「家の手伝いがあり学校を休みがちになった」など、入学した後に学年が遅れる子どももいます。でもさらに多いのは、学校への入学自体が遅かったケースです。「きょうだいの世話をしなければならなかった」「学校まで山道を歩いて1時間半～2時間かかるため」という事情の他、「学校に行きたがらなかった」「両親が、まだ学校に通うには早いと考え、9歳で入学させた」という例も多くあります。その理由をネパール事務所長の田中真理子に聞きました。



田中:親が学校に通ったことがない家庭の場合、学校という知らない世界への恐怖心が子どもたちにあり、学校に行きたがらない子どももいます。そんな子どもに対して、親も無理強いしません。その後、近所の同年齢の子どもたちが楽しそうに通学する姿を見て、「自分も行きたい」と思うようになり、遅れて通い始める子どももいます。満5歳に達したら小学校入学ということをとえ親が知っていたとしても、学校が遠くにある場合や子どもの体格が小柄な場合、もしくは性格的に引込み思案の

子どもの場合、「自分の子どもは学校に通うにはまだ早い」と親は考え、入学を遅らせることがあります。チャイルドの親は読み書きができない、あるいは簡単な読み書きはできてもこれまで一度も学校に通ったことがないことが多く、こうした家庭環境は、子どもたちの就学に大きな影響を与えています。



年齢が違って、学年は同じ。子どもたちは一生懸命勉強します。

ネパールの子どもたちが安心して学校を続け、中等教育を修了することは、子どもたちにとっても家族にとっても、よりよい未来に向けた大きな一歩となります。その一歩をスポンサーシップ・プログラムは支えています。

スリランカから アーユボワン

vol.6



安心して勉強ができる!

アーユボワン:シンハラ語で「こんにちは」

スリランカの支援地域では電気がない家庭もあります。夜、チャイルドたちが食事や勉強をするには、石油ランプの明かりを使うしかありません。しかし、その石油ランプには大きな危険が潜んでいます。ランプをうっかりひっくり返してしまったり、大火傷をしたり、家が火事になってしまうことがあるのです。実際にチャイルドが大火傷をしたこともありました。



危険が伴うランプ。空き瓶を利用しており、倒れると石油がこぼれる。

協力センターの一つ、ダスナ・チャイルド・デベロップメント・プログラムは、チャイルドたちや家族の安全を確保するために、安全ランプを支給しています。倒しても石油がこぼれて炎が広がらないような仕組みになっており、真鍮(しんちゅう)でできています。プログラムでは、今までに400世帯のチャイルドの家庭にこの安全ランプを支給しました。このランプにより、チャイルドたちは安心して、食事をしたり勉強ができるようになりました。

親たちの感謝の言葉

「私たちの家に電気はありません。今まで夜、子どもたちだけが家にいて勉強する場合、ランプを使わせることはとても心配でした。倒して火事になることや火傷が怖かったからです。でも、プログラムによって支給されたこのランプならば安心です。倒しても、万が一テーブルから落ちてても火が広がる心配がありませんから。」(チャイルドの母親)



転倒しても安全なランプ



安全ランプの下で勉強するチャイルド

スポンサーシップ・プログラム・スタートアップ事業

4月よりスポンサーシップ・プログラムを無事に開始することができました!



- 【ネパール】
- ・オカルドゥンガ地域病院事業
- ▶ スポンサーシップ・プログラム・スタートアップ事業
- ・アマルプール小学校建設事業
- ・保健行政システムのキャパシティ・ビルディングによるネパールの女性と子どもの栄養改善計画フォローアップ事業
- ・故細野雅央様からのご寄付による教育支援プロジェクト
- 【フィリピン】
- ・バラワン少数民族生活改善事業第3期

- 協力期間: 2009年8月1日～2010年3月31日
- 支援対象: ネパール、ラメチャップ郡内のラムプール、ラメチャップの2カ村3校の教師、学校運営委員会、生徒約1,400名とその家族
- 協力団体: RBPW (Ramechhap Business & Professional Women)

ネパールにおけるスポンサーシップ・プログラム・スタートアップ事業として、まずネパール政府との事業合意書の準備をしました。そして、政府関係者や他NGOからの聞き取り、これまでの調査データを元に、ラメチャップ郡を事業実施郡として選び、パートナー団体としてRamechhap business & Professional Women (RBPW:ネパールのNGO)を選びました。

次に、RBPWとともに、8月から支援地域のベースライン・サーベイ(事前調査)を実施し、地域が抱える子どもの問題を洗い出しました。その結果を村人と話し合い、教育や保健、世帯の収入に関して状況の悪い2つの村と、その村内にある3つの学校の生徒の中で、もっとも困難な状況にある子ども150名をチャイルドとして選びました。これらのチャイルドに対して、通学に必要な制服、バッグ、サンダル、文房具を配布し



村人にインタビューする調査員(左)

ました。また、チャイルドを含む勉強が遅れている生徒のために、村人の中から先生役を選び、放課後に補習クラスを村内の11の集落で開始しました。

また、地域全体の教育環境が良くなるよう、教員、保護者、村役場メンバーなどから構成される学校運営委員会メンバーと、公立小学校を管轄する郡教育事務所職員に対して、子どもの権利に関する研修、子どもにやさしい教授法研修、教材配布、次年度の学校・郡教育計画作成支援などを行いました。

RBPWに対しては、支援地での事務所設置支援、スタッフへのオリエンテーション・研修を行いました。これらの準備をもとに、2010年度は、さらに150名のチャイルドを増やし、本格的に事業を開始する予定です。



補習クラスに参加する子どもたち



つながり・ぶろじゅくと
TSUNAGARI
PROJECT

～ 5周年記念事業 ～

5周年記念事業の準備が着々と進んでいます。9月後半から始まる記念事業にどうぞご参加ください。これに先立ち、5周年記念ならではのユニークな情報をお届けするメールマガジンが7月からスタートします。お楽しみに!!

記念イベント

「あなたとつくる 子どもの笑顔・希望・未来」
(活動報告会)

9月18日(土)の午後、東京(場所未定)で、5周年記念イベントを開催します。支援センター長のネリベスさん(支援センター番号19、インファンタ・コミュニティー・デベロップメント・センター)と、教師をしている元チャイルド、オデッサさんをゲストとしてフィリピンより招待します。当日は、ゲストのスピーチ、5周年記念映画(撮影が進んでいます)の上映、その他、盛りだくさんのプログラムを用意してお待ちしています。

情報はメルマガで

メールマガジンは7月から配信開始予定です。配信を希望される方は、お名前と受信を希望されるメールアドレスを、メールの件名に「メルマガ希望」とご記入になり、childfund@childfund.or.jp までお送りください。

「各地での活動報告会」(9月19日から26日まで)

ゲストとスタッフが各地で報告会をいたします。訪問を予定している都市は、札幌、名古屋、大阪、福岡、熊本です。これらの都市にお住まいの方で、報告会の会場の手配などでお手伝いいただける方は、ぜひご連絡ください。今回訪問できない地域の皆様にはこの場を借りてお詫びいたします。

記念イベントと、各地での活動報告会の詳細は、次回のSMILES 20号(8月発行)に同封するチラシをご覧ください。

チャリティコンサート

2011年3月に実施の予定です。
日時、場所、出演者は調整中です。

5周年記念イベント、報告会、映画上映に関するお問い合わせは、事務局までお願いいたします。

電話:03-3399-8123

メール:childfund@childfund.or.jp

* ハロハロとはタガログ語(フィリピン語)で“いろいろ”“まぜこぜ”という意味です。
このページは読者の皆様からのリクエストや投稿などをもとに作るページです。

ハロハロのページ

支援者さん、こんにちは!

「他のスポンサーの方と交流したい!」という声や、「どのような方が支援者にいるか知りたい」といった声をお寄せいただくことがあります。そこで、2010年度の「ハロハロのページ」は、ご支援くださる皆様をご紹介します。第一弾となる今号は、1989年からスポンサーとしてフィリピンのチャイルドをご支援くださる目白聖公会イクスティアをご紹介します。安井友子さんと鈴木ゆう子さんにお話を聞きました。



イクスティア代表安井さん(右)と前代表の鈴木さん(左)

Q 「イクスティア」とはどのような意味ですか?

A ギリシャ語で「小さな魚」という意味です。イクスティアは目白聖公会の奉仕グループです。

Q どのようなグループかもう少し詳しくお聞かせください。

A 目白聖公会は、子どもたちの成長を願って、三歳までの幼児と母親が参加して自主保育をするプレイグループ活動をしています。イクスティアは、そのプレイグループの親の会から発展して、1987年に誕生した奉仕グループです。今、15名のメンバーがいます。

毎年、教会バザーでメンバーが手作りのお菓子や手芸品を販売して、その収益からフィリピンのチャイルドを支援しています。このバザーには300人から400人の地域の方が来てくださっています。また、おむつを縫って、老人ホームにお送りする奉仕活動もしています。



大勢の地域の方々にぎわうバザー。開始前には、表通りに行列ができません。

イクスティアの「売り場」には手作りのお菓子や手芸品が並びます。



Q チャイルドへの支援についてどのような感想をお持ちですか?

A ノリエル君に始まって、今応援しているゲネシス君は3人目のチャイルドです。貧しい生活を強いられる子どもたちの才能を引き出し、成長に繋げることができる、この支援に喜びをおぼえながら協力しています。事務局から送られてくる「成長の記録」を通して、チャイルドが頑張っている姿を知り、こちらが励まされます。ゲネシス君は成績も良く、自分の息子ではないのですが、誇らしく感じています。

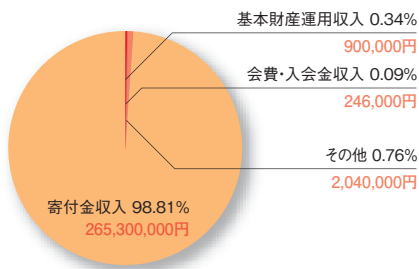
インフォメーション コーナー

2010年度予算の概要

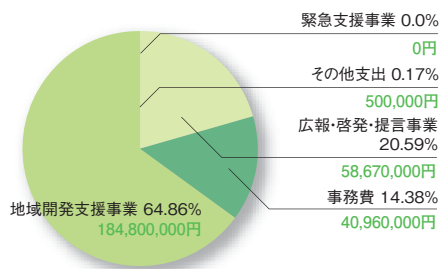
2010年3月12日にチャイルド・ファンド・ジャパンの総会が開かれ、2010年度の事業計画と予算が承認されました。厳しい予算ですが、決算では収支が改善できるよう心がけてまいります。引き続き皆様のご支援を心からお願い申し上げます。

次期繰越収支差額：20,838,614円
 前期繰越収支差額：37,282,614円
 当期収支差額：-16,444,000円

収入の部 268,486,000円



支出の部 284,930,000円



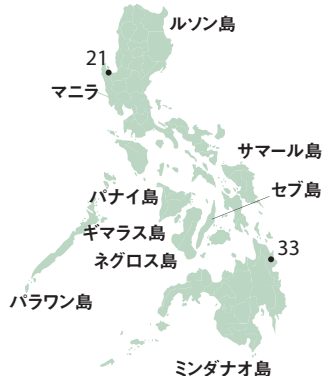
報告

2つの地域のチャイルドと家族が自立を迎えました。

フィリピンの支援地域であるセンター21と33は、チャイルドの親たちが立ち上げた協同組合などを通して奨学金を提供し、地域の問題を自分たちで担うまでに成長することができました。チャイルド・ファンド・ジャパンとセンターは協議の結果、本年5月末で地域への支援を終結することに合意しました。人々のこのような成長はひとえに皆様からの大きなご支援の賜物です。深く感謝いたします。



サマーキャンプで自分たちの問題を考え、意見を交換するチャイルドたち(センター21)



お願い

ご家庭に眠っている古本を、今年も送ってください

一企業との協働イベント チャリティ古本市2010開催決定!

昨年に引き続き企業と協働してチャリティ古本市を(8月23日から27日までの予定)開催します。お読みになった古本を、ぜひ送ってください。

〇お送りいただきたい本

- ・文庫・新書(17×11cmのサイズ)
- ・単行本(新書サイズより大きい、ハードカバーの本)
- ・児童書

×受付られないもの

雑誌・週刊誌・コミック誌・非売品(同人誌・パンフレットなど)

送付先:チャイルド・ファンド・ジャパン「古本市係」

住所:〒167-0041 東京都杉並区善福寺2-17-5

電話:03-3399-8123 担当:募金グループ

申し訳ございませんが、送料はご負担願います。

締め切りは8月16日(月)です。古本市の日時、場所など詳しい内容はチャイルド・ファンド・ジャパンのホームページで追ってお知らせします。



報告

書き損じハガキで学校が完成しました

昨年に皆様よりお送りいただいた書き損じハガキや切手でネパールに学校を建設しました。2月に完成式典が催され、ネパール事務所長が出席しました。



式典でスピーチするネパール事務所長の田中真理子



完成した学校

ご協力くださった皆様、ありがとうございます。今年も引き続き書き損じハガキを募集しております。今年にはネパールの子どもたちに教材を贈ります。どうぞご協力ください。

報告

冬募金キャンペーンのご報告

2009年11月末よりご協力をお願いしていたオカルドゥンガ地域病院募金キャンペーンは、2010年3月末までに10,276,785円(1,324口)の支援金が集まりました。皆様からの温かいご支援に感謝申し上げます。オカルドゥンガ地域病院の活動につきましては、随時SMILESや年次報告書、ホームページでご報告しています。

お詫び

SMILES 18号の訂正

SMILES 18号の表紙でご紹介いたしました「シリーズ“食べる”5」ですが、「シリーズ“食べる”7」の誤りでした。お詫びして訂正いたします。

Ch^{ild}Fund Japan

Vision Mission

チャイルド・ファンド・ジャパンはここに掲げるビジョン(目標)、ミッション(使命)に基づいて活動します。

ビジョン(目標)

すべての子どもに開かれた未来を約束する国際社会の形成

ミッション(使命)

生かし生かされる国際協力を通じて子どもの権利を守る

チャイルド・ファンド・アライアンス

Ch^{ild}Fund Alliance

人種、宗教、性別、国籍を問わず世界の子どもたちに、効果的な支援活動をするためのネットワークで、子どもたちに向けたスポンサーシップ・プログラムを行う12団体から構成されています。チャイルド・ファンド・ジャパンは2005年4月に加盟しました。

スマイルズ
 <チャイルド・ファンドより SMILES> 2010年5月発行
 〒167-0041 東京都杉並区善福寺2-17-5
 特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパン
 理事長 深町正信(青山学院名誉院長) 事務局長 小林毅
 TEL. 03-3399-8123 FAX. 03-3399-0730
 E-mail: childfund@childfund.or.jp
 URL: http://www.childfund.or.jp/

<デザイン>
 モスデザイン研究所
 <印刷>
 有限会社東西印刷



大豆油インキを使用